

機械メーカー+ユーザー訪問 **日高機械+竹田建具製作所**  
意欲的な建具メーカーへ納品



油圧サーボ角のみ盤 HC-D5-SV 型/自動一面鉋盤 HP□ 400 型/自動一面鉋盤 H-07084-2 型



NC3軸6ヘッド全自動複合加工機 HFK-2400-6J-4NC 型



NC 上下溝加工機 H-07084-1 型

日高グループの日高機械(石川県羽咋郡志賀町徳田、日高明正社長、電話 0767-37-1311)は、建具用加工機械6機種を田鶴浜(たつるはま)建具で知られる産地の(有)竹田建具製作所(石川県七尾市田鶴浜町ぬ部7番地、竹田憲昭社長、電話 0767-68-2288)へ、10月末稼働をメドに新規納入をする。

今回、設備投資に踏み切った竹田建具製作所では、地盤沈下の激しい地場産業の一つ「田鶴浜建具」の再生を目指してこの状況を打破し、建具の活路を見出そうとしている。これを受けて日高グループでは、営業・加工技術・マネジメントなど側面からサポートを行ない、竹田建具製作所の成功に向けて協力を惜しみなく続けたい、とエールを贈っている。

#### 注目、隘路打破に英断

田鶴浜建具業界は、最盛期には90軒前後が隆盛を誇っていたが、現在は30数軒で組合員も30軒を切っているという。職人が3名以上いる建具屋は数軒しかなく、纏まった受注と短納期に対応できない状況だ。

また、高齢化が進み後継者が育たないため現状を守ることに終始し、積極的な営業展開や製品開発が進まないのが現状であるが、こうした状況下にも拘わらず、思い切った投資と開発意欲に田鶴浜建具業界関係者も強く注目している。



「新鋭機械の導入を図って、少しでも建具産地として元気の出る田鶴浜建具の奮起に貢献したい」と語る竹田憲昭社長と同社



(写真上)田鶴浜建具センターの販売展示場とサイン

田鶴浜建具センターの田鶴浜建具工業協同組合(七尾市田鶴浜町ぬ部 11 番地、電話 0767-68-2021)によれば、「田鶴浜建具」の起源は今を遡ること 350 年前の慶安 3 年(1650 年)。この地の領主が当町の東嶺寺を再建する際に尾張より指物師を招き、障子、欄間などの製作にあたらせたといわれ、その優れた技は現在に受け継がれている。

「田鶴浜建具」の特徴は、重厚さが漂う塗りの豪華さと、木が織りなす精巧華美な気品にある。300 年の伝統に育まれた風格と、磨き上げられた確かな技術によって生まれた障子戸、ふすま、書院、欄間、ガラス戸などの伝統的建具から、さまざまな現代的建具まで幅広く製作し、潤いのある住まいづくりに貢献している。

### 新工場と整備に力こぶ

日高グループは、日高機械を筆頭に、株式会社田辺鉄工所(石川県羽咋郡志賀町堀松 5-1、同社長)、株式会社田鶴浜マシンウッド(石川県田鶴浜町吉田、同社長)の本社工場からなる。ほかに工場は富来(とぎ)工場(石川県羽咋郡志賀町富来地頭町甲 150)、ポアズ工場(石川県

羽咋郡志賀町大島 8-13-7)、能登工場(石川県鳳珠郡能登町石井)の 3 工場。

生産機械は、木工機械をはじめドア・障子など建具関連機械、金具工法プレカット機械、アルミ型材加工機械、セラミック外壁材加工機械、ウレタン断熱パネル加工機械、トラック荷台ネジ締め機械、大型製品の加工機械など汎用の機械から特殊機械までの設計および製作・販売。



敷地約 16500 平方メートル、建坪約 3300 平方メートルの第 2 工場を 5 億円投じて新設。重量のある工作機械と木材加工機械の組み立てに、20トンクレーンも装備



田鶴浜マシンウッドで活躍するレトロフィットマシン



びっくり！

独・ワールドリッヒ社製の巨大なプレーナー、この巨大マシンが先の能登地震でズレてその跡が残った)この分だけ地面がズレて、ちょうどダルマ落しのように、機械はそのままで地面が動いたという



富来工場・常設展示場



(写真左＝田辺鉄工所製)

大リーグの通算本塁打記録を31年ぶりに更新したバリー・ボンズ選手が、今季から日本製バットを使っている。製造元は、富山県南砺市の太平BAT製作所(本居和義社長)だ。バット作りひと筋54年の職人。プロ野球を支えてきた同社の歴史に、新たな大物の名前が加わった。

そこへ、さらに頼もしい助っ人が加わる。その名はバット専用のNC専用機だ。コンピューター制御で100分の1ミリの精度で削り、選手の細かな要望に応える。精度は熟練の職人を上回るという。

### 得意なレトロフィットとボアズ事業

工作機械も得意分野だが、旧式の機械を改造して、最新の制御装置を取り付けるなどして新しい機械に再生することにも腐心している。日高明広専務は「旧式の機械はダイヤモンドの原石。磨き上げる過程で技術力の高さを思い知らされる」。倉庫には大小の平削り盤や研磨機など約300台が出番を待っている。

このほかに、間伐材を有効利用しようと森林経営の株式会社水鯨(名古屋市)と共同で事業展開しているボアズは、スギやヒノキの間伐材を使った独自のパネル工法で事業が7月に始まった。15°角上・長さ8尺～12尺の角材を合わせたパネルで壁も屋根も床も組み立てるため頑丈な構造、いわゆる「柱パネル工法」だ。耐震性や耐火性に優れ、一般住宅や事務所に最適でその成果が期待されている。

こうした地に足をつけた”広角打法”は、それぞれが確かなコンセプトで裏付けられている。レトロフィットしかり、ボアズについては「優れた技術力を生かせば間伐材の有効利用につながり、水と空気を守り環境保全にも役に立つことになる」と日高専務。また「その加工工場は、国産材の活用に関心がある事業者の方にも利用してもらいたい。県の地場産業の用途拡大につながっていけば」と続けた。



15°角上・長さ8尺～12尺の角材を合わせたパネルで壁も屋根も床も組み立てるため頑丈な構造、いわゆる「柱パネル工法」だ

参考資料／日高グループ、北陸中日新聞、ASASHI.COM、田鶴浜建具工業協同組合

日高グループ <http://www.hidaka.gr.jp/>

上記の記事は、「ウッドファスト」

<http://www.ml.mediakat.ne.jp/~woodfast/hidaka/hidaakapage.html> <http://www.woodfast.net> 記事で  
す